

タイのミツバチと養蜂

Siriwat Wongsiri and Sureerat Deowanish

タイの在来種であるトウヨウミツバチを用いた伝統養蜂は南部、タイ湾にあるサムイ島のココナツ農園周辺で始まった。しかしその時期を示す記録は残っていない。一方、北京にある中国農業科学院蜜蜂研究所の博物館が所蔵する文献に、雲南省に住むタイ族の養蜂は約1,000年前に、シーサンパンナ地域で始まったとある。また、タイの伝統医薬の製法を記した古い医学書には、ハチミツを数種の薬草と共に使う例が多数見られる。これらの生薬は今日でもタイの民間薬を扱う漢方薬局で販売されている。

ミツバチ種

現在知られる9種のミツバチのうち、トウヨウミツバチ (*A. cerana*)、コミツバチ (*A. florea*)、クロコミツバチ (*A. andreniformis*)、オオミツバチ (*A. dorsata*) の4種がタイに在来種として生息し、南部ナラティワットの海岸平野(海拔10m)から北部タイの最高峰(Doi Inthanon ドイインタノン 海拔2,100m)まで広く分布している。セイヨウミツバチ (*A. mellifera*) は、1940年代中頃に研究目的でチュラロンコーン大学に初めて輸入された。現在はタイ北部の養蜂企業のハチミツ生産を担う主要養蜂種である。

コミツバチは樹木の小枝を包み込むようにして一枚巣をつくる。全国に多数生息するが、中部地域では特に盛んに採集している。バンコク南西の町サムットソングラム (Samut Songkhram) では枝を振ったり、煙をかけて蜂を追い払い、蜂のいなくなった巣を切り取っている。コミツバチの巣の年間採集量は1万コロニー以上あり、そのハチミツと幼虫はタイの人々に

大変好まれている。

クロコミツバチの巣の大きさと構造はコミツバチと変わらないが、腹部の色に特徴があり、同所的に生息する他のミツバチ種と区別される。クロコミツバチの生息が確認されているのはタイ国内では10県に限られる。このためそのハチミツや蜂児が市販されることはない。

熱帯地域に分布するオオミツバチ (タイ語では“プルワン phung luwang”) は最大の蜂で、長さ0.45-2.0m、幅0.15-1.10mにもなる大きな垂れ下がる一枚巣をつくる。営巣場所はせり出したバルコニーや上水タンクの下側、崖の張り出しの下部、高い木から横に伸びた太い枝の下側などである (図1)。

オオミツバチのハニーハンティング

オオミツバチが高い木につくる大きな巣を採集するハニーハンティングは、普通5、6名のチームで行われる。タイでは2~3月に採集が行われ、これらの月は“蜜月 (ナムプドゥアンハ nam phung duan ha)” と呼ばれる。営巣後一か月以上たった巣が対象となる。竹で作ったはしごを登り、7~25mもの高所にあるオ



図1「ミツバチの木」に鈴なりのオオミツバチの巣

オミツバチの巣を切り取る。これを巣ごと押しつぶしてハチミツを搾り、濾したのち 1.5ℓ入りのビンに保存する。昔ながらの方法なので、花粉や蜂児がハチミツに混入している。しかしオオミツバチは多くの野生植物に訪花して蜜を集めるので、そのハチミツは強く鋭い甘みがあるとして、タイでは他のミツバチのものとは比べ、大変人気がある。オオミツバチハチミツの価格は 1 ビンで約 250 バーツ (1000 円) である。タイの伝統医療でオオミツバチのハチミツは止血、腎臓病、皮膚の手入れ、滋養強壮に効果があるとして広く使われている。

蜂児 (有蓋、無蓋とも) はタンパク源として調理され (蒸す、揚げる) 食卓に上る。また飲み物と一緒に唐揚げの蜂児をスナックとして食べるのも大変好まれ (Chen et al. 1997)。

トウヨウミツバチの養蜂

タイ南部を中心に約 8,000 群のトウヨウミツバチが飼養され、その内約 2,000 群はサムイ島、少数がプーケット島で飼われている。巣箱は南部やサムイ島ではココヤシの幹を使った丸太巣箱や、木箱である。タイ北部では観光ツアーやバタフライ・ファームにトウヨウミツバチを織り込む養蜂家のごくわずかみられるが、おおむねセイヨウミツバチの養蜂になってしまったといえる。

アジア地域の他の国々と同様、トウヨウミツバチに関する最大の課題は逃去である。ハチミツ収穫後は 70~85% の蜂群が、可動巣枠の近代的巣箱に移した場合はほぼすべての蜂群が巣を捨てて逃げ去る。このため養蜂家はトウヨウミツバチ群を積極的に近代的巣箱に移そうとはしない。丸太巣箱の蜂群の年間ハチミツ生産量は 5~10kg と大変少なく、セイヨウミツバチの 1/5 から 1/10 程度にしかない。トウヨウミツバチの養蜂家が蜜源の乏しい時期にも給餌を行わないのがよくないとの考えから、蜂群を近代的巣箱で飼養し、流蜜時期に合わせ、例えばココナツ農園、ゴム農園、ランブータン農園と移動養蜂を行い、ハチミツ収量を高めようとの動きがはじまっている。しかし現状ではタ

イのトウヨウミツバチ養蜂は、中国ほど着実に成果を上げているとはいえない。

セイヨウミツバチの養蜂

1970 年代に台湾から養蜂家の手で再度導入されたセイヨウミツバチが、チェンマイを中心とした北部タイで盛んに飼養されている (図 2)。1986 年の蜂群飼養数はセイヨウミツバチ 32,000 群、(トウヨウミツバチ 8,000 群) であったが、現在ではチェンマイ県の北部養蜂協会 (NBA) に属する 280 名の会員で、合計 20 万群、そのほか南部に約 500 群、東北部に 10,000 群、中央 (バンコク) 部に 500 群いる。NBA の数字が示すように、トウヨウミツバチは驚くべき速度でセイヨウミツバチに取って代わられている。

飼養蜂群数により養蜂家を分類すると、50 群以下が 40%、100 群までが 50%、100~2,000 群を飼う養蜂家は 10% である。

養蜂家は中国の移動用単箱を基にした形の巣箱を使い、内蓋や継巣箱は使わない。11 月から 3 月の主要流蜜期には一群を巣板 5~7 枚程度の大きさにする。 *Eupatorium odoratum* (フジバカマの仲間) が 11 月上旬に咲き始め、つづ



図 2 セイヨウミツバチ (上) はハチミツ生産 (下) の主力種である

いて *Ceiba pentandra* (パンヤノキ), *Democarpus longana* (ロンガン, 龍眼), *Litchi chinensis* (ライチー) が開花する。タイ南部の主要蜜源は *Hevea brasiliensis* (ゴムノキ) や *Nephelium lappaceum* (ランブータン) である。

北部タイのセイヨウミツバチの年間ハチミツ生産量は平均すると1群当り35kgであるが、主要流蜜期に限れば、50kg/群になる。1996～97年にチェンマイで3,000tのハチミツが生産された。ローヤルゼリーは年間1.5kg/群、全体で15tの生産量で、その内5tは国内で消費され、10tが日本や、台湾に輸出された。

王室と養蜂開発プロジェクト

タイのシリキット王妃は村落地域の貧しい人々の収入増加のため、養蜂、漁業、養鶏など多彩なプロジェクトを奨励している。王妃の言葉によれば、「タイの野生ミツバチを用いた養蜂、およびオオミツバチのハニーハンティングは我が国の伝統的文化遺産であるが、今日野生ミツバチは急速に生息数が減少し、それにかかわる文化も消え去ろうとしている。私たちは速やかに研究を進め、その保護を計らなければならない。コロニーすべてを焼き尽くす従来のハニーハンティングは、ミツバチの生息数を減らすだけでなく、熱帯雨林にも大きな打撃を与えるものである。なぜなら野生のミツバチが送粉者としての役割を果たすことによって、森林内の数え切れないほどの種類の植物が結実し、生い茂り、そこで鳥、野生動物、あるいはミツバチ自身が生きていくための環境が整えられているのである。もしミツバチが消えてしまえば、森の植物は野生動物の食料となる果実を結ばなくなり、動物は生存できない。やがて花も咲かなくなって、タイの森林は消滅する、森林が消滅すると、我が国の水資源も枯渇する。

このように、野生のミツバチは我々の地球環境を維持する上で、極めて重要な要素なのである。私たちは急激に減少しているミツバチを救い、ハニーハンティングや伝統養蜂の文化遺産

を護るためだけでなく、私たちの環境を美しい調和の取れた状態で持続するためにも、努力を積み重ねなければならない。」

王妃の提案に基づき、「山岳地域養蜂」プロジェクト (MB) が陸軍と森林省のジョイント事業として始まった。このMBの目的は山岳地域に住むハニーハンターを対象に、養蜂の研修を実施し、ミツバチとそれが果たす森林生態系での重要な役割を認識してもらうことである。

第7回熱帯養蜂会議と第5回アジア養蜂研究協会大会の開催

2000年3月19～25日に「管理法と多様性」をテーマに、国際ミツバチ研究協会 (IBRA) の第7回熱帯養蜂会議が第5回アジア養蜂研究協会大会との共催で、チェンマイ市のロータスホテルで開催される。

◎ハチ類が熱帯環境ではたす役割の重要性を認識する、◎21世紀におけるミツバチ科学研究と実際の蜂群管理法との新しい協力関係樹立を促す、◎最新の発見や、アイデアを持ち寄り、検討する場を提供する、◎熱帯の農林業環境におけるハチ類の持続可能な方法での利用を奨励する、などを目的とした会議には、世界から約2000名の参加者が予想される。

タイとアジアの多様なミツバチと養蜂に貢献する、実りある会議にするために、準備を進めており、日本からも多くの参加をお待ちしている。(著者の住所は下記参照) (翻訳 榎本ひとみ)

参考文献

- 中村ら. 1991. ミツバチ科学 12(1): 27-30.
Wongsiri, S. 1989. ミツバチ科学 10(4): 160-164.
Wongsiri, S. et al. (eds). 1991. Biodiversity of Honey Bees in Thailand. BBRU, Chulalongkorn Univ. 111 pp.

SIRIWAT WONGSIRI and SUREERAT DEOWANISH. Honeybees and beekeeping in Thailand. *Honeybee Science* (1999) 20(3):135-137. Bee Biology Research Unit, Department of Biology, Faculty of Science, Chulalongkorn University, Bangkok, 10330, Thailand.